

二〇一七年度入学選抜試験問題

国語

(六〇分)

問題はⅠからⅢまで(16ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

パソコンやインターネットが普及し、情報ネットワーク社会が形成されると、大学生のレポートや子どもたちの宿題の仕方が変わってきました。この状況に直面して、教師からは悲鳴のようなものが聞こえてきます。雑誌やTVなどで、コピーの弊害がしばしば話題になっています。ならば、こうしたコピーの蔓延<sup>\*まんえん</sup>に、いったいどう対応したらいいのでしょうか。〔中略〕

コピーが非難されるとき、ふつう「オリジナル」と「コピー」の対立が前提されています。教師が「君のレポートはコピーだね」と言うとき、その意味は「君のオリジナルではない」と言いたいのです。

こうしたオリジナルとコピーの対立に注目すると、おそらく二つの関係が取り出せるでしょう。一つは、オリジナルからコピーが生じることであり、もう一つは、オリジナルの方がコピーより価値が高いことです。〔中略〕

しかし、オリジナルとコピーの対立は、どこまでイジ<sup>①</sup>できるのでしょうか。というのも、コピーされる元の本じたいが、そもそも印刷物であって、コピーされたものと言えるからです。とすれば、図書館の本をコピーするのは、コピー(本)をコピーしているのではないのでしょうか。同じことは、コピーの場合にも言えるでしょう。グーグルでケンサク<sup>②</sup>して、情報をコピーするとき、その情報じたいがオリジナルかどうかは分かりません。その情報が別の情報からのコピーだ、という可能性はじつさによくあります。コピーはオリジナルのコピーというより、コピーのコピーと言った方が適切かもしれません。〔中略〕

そこで、あらためて問い直すべきは、コピーや模倣がはたして価値が低いのか、ということですが、子どもたちから、「オリジナルはよく、コピーは悪い」と絶えず教えられてきました。これを、「オリジナル信仰」と呼んでおきましょう。「個性を大切にしよう!」というのは、子どもたちにもしつかりと根づいているようです。しかし、コピーや模倣って、そんなに悪いことなのでしょうか。

注意するまでもありませんが、言語を学ぶことから始まって、私たちは自分ひとりで知識をつくることはできません。意識的に模倣する場合がありますが、たいていは無意識的な仕方から他からの情報を受け入れています。自分独自の考えだと思っ

も、げんみつにブンセキすれば、そのオリジナルは自分の外にあります。したがって、コピーを否定してしまえば、自分の考えもなくなってしまうのです。これは、何を意味しているのでしょうか。

子どもが言葉を学ぶことでも分かるように、私たちはまず「模倣」することから始めなくてはなりません。日本語の「まねぶ」と「まねぶ」が、同じ語源であることはよく知られています。こうした模倣を通してはじめて、自分独自のものが生まれるのです。自分の思いを表現するためには、他人から習得した言葉を使わなくてはなりません。小林秀雄は『モオツァルト』のなかで、きつぱりと言い切っています。

模倣は独創の母である。唯一人のほんたうの母親である。二人を引離して了つたのは、ほんの近代の趣味に過ぎない。模倣してみないで、どうして模倣出来ぬものに出会へようか。(小林秀雄『モオツァルト』)

こうしたことは、文学作品だけでなく、生活のあらゆるリョウイキにまで及んでいます。日常生活をふり返ってみましょう。たとえば、朝起きれば、家族に「おはようー」と挨拶し、顔を洗います。朝食を食べたあとで歯を磨き、身支度を整えるでしょう。それから、「行ってきます！」と声をかけて、学校に向かいます。ごくふつうの言動なので、どこにも不思議さはないのですが、この一連のふるまいは「まねる」ことを基本にしています。

日常生活では、それぞれの場面で言動はだいたい決まっております、いわば「見えない台本」ともいうものが存在します。私たちはまず、この台本のセリフを覚え、その役割を意識しなくとも演じられるように「まねぶ」わけです。とすれば、「オリジナルからコピーが生まれる」という文を、まったくひっくり返すべきではないでしょうか。つまり、コピーからオリジナルが生まれるのです。したがって、コピーだからといって、オリジナルより劣っているわけではありません。(中略)

このように考えると、もはや「オリジナル」ということじたいが、怪しくなってくるのではないのでしょうか。コピーを非難するとき、前提として「オリジナル」や「個性」への信仰がありました。ところが、この「オリジナル」や「個性」こそが、現代思想で

疑問に付されているのです。

現代世界では、人間の個性を語ることは、もはや笑い話になっています。個性と見えるものは、流行物を身につけるか、他人からの受け売りの知識をひけらかすか、メディアの情報に振り回されるか、いずれかであるようです。そのどれも、「オリジナル」でないことは、言うまでもありません。個人が苦勞して自分の思想を形成する、といった教養主義は、いまではすっかり鳴りを潜めています。手っ取り早くコピーして、見栄えのする知識を身につけることが、成功への近道なのです。

こうした状況から考えると、教育の世界でも「コピー」を否定することは不可能だと言わなくてはなりません。レポートでコピーを全面的に禁止したからといって、問題が片づく訳でもありません。学生は、日々コピーする環境に囲まれ、それを利用するよう促されています。インターネットが使えない孤島ならしかたありませんが、もうそんな世界はなくなってしまうました。「コピーがいいか悪いか」という議論ではなく、「どんなコピーならよく、どんなコピーは悪いか」を真剣に考えるときではないでしょうか。

もちろんこれは、学生に対する問題だけではありません。研究者の著作も引用(コピー)からなるかぎり、「研究者倫理」としてコピーの問題は重要でしょう。「自分の考えや議論はコピーとは一切関係ない」という人は、自己欺瞞きまんを犯しているか、自分のことをじゅうぶん理解していないだけでしょう。

\* デリダをもじっていえば、「つねにすでにコピーする可能性があるからこそ、新たに自分のオリジナルな考えを形成することも可能になる。」まさに、「コピーする知性」こそが、現代社会の条件なのです。でも、コピーするとき、どこから取ってきたのか出典ぐらいは、明示しておきたいと思えます。それを隠して、あたかも自分の「オリジナルな作品」に見せることは、まさに「オリジナル信仰」丸出しだからです。コピーであることを示しながらコピーすること、これがコピーの「エチカ(倫理)＝生きかた」と言えるでしょう。

(岡本裕一朗『12歳からの現代思想』による)

【注】 \*蔓延 〓 悪習などがひろがること。

\*自己欺瞞 〓 自分で自分をあざむくこと。

\*デリダ 〓 フランスの哲学者。

問一 〓 線部①～④のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 〓 線部1「君のレポートはコピーだね」とあるが、このように言うことでオリジナルでないことが非難されるのはなぜか。二つあげよ。

問三 〓 線部2「そのオリジナルは自分の外にあります」とあるが、「オリジナル」が「外にある」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 自分独自の考えにこだわっているのは、オリジナル信仰そのものということ。
- イ 自分独自の考えについては、現代思想においてその存在すら否定されているということ。
- ウ 自分独自の考えを支える知識は、他からの情報を受け入れることで形成されているということ。
- エ 自分独自の考えを形づくっているのは、現代社会の発達した情報ネットワークそのものということ。

問四 〓 線部3「二人」は何をたとえているか。それぞれ文中の語句を書き抜け。

問五 ——線部4「『オリジナル』ということじたいが、怪しくなってくる」とあるが、なぜか。筆者の考えを説明せよ。

問六 ——線部5「受け売り」、6「鳴りを潜めて」の意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

5「受け売り」

- ア 他人の意見や説を納得しないまま披露すること。
- イ 他人の意見や説をあやふやな形で披露すること。
- ウ 他人の意見や説をそのまま自分のものとすること。
- エ 他人の意見や説を買い取って自分のものとすること。

6「鳴りを潜めて」

- ア 時代遅れになって
- イ 表だった動きを止めて
- ウ 活動を完全にしなくなって
- エ 大げさな広告をしなくなって

問七 ——線部7「どんなコピーペならよく、どんなコピーペは悪いか」とあるが、筆者はどのようなコピーペがよく、どのようなコピーペが悪いかと考えているか。それぞれ、「オリジナル」という語を用いて説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

思えば、うみかは低学年の頃からちよつと変わつてた。

うみかの『科学』についてきたミニミキサーで作つた、粉末が材料のバナナジュースを飲ませてもらった時のこと。学校で買  
う本のふろくでおやつができるなんて、と感動する私を横目に、「やつぱり、粉と水の味だね」としれつとした顔で言う。あの  
頃から、かわいくなかつた。

うちの妹は、あんまり人にどう見られるかを気にしないんだと思う。

そして、私はそういうあの子に、よくイライラさせられる。〔中略〕

<sup>1</sup> 学校で、うみかに特定の仲良しがいるふうじゃないことを、私が気にしてることだつて、きつと気づいてない。

あの子の学年の子は、誰もうみかを悪く言つてる様子はない。むしろ「うみかちゃん、おもしろい」つて受け入れてる。だけ  
ど、教室移動も、トイレに行く時も、姿を見かける時、うみかはいつも一人だ。うちの学校は小さくて、どの学年もだいたい  
一クラスか、多くて二クラス。全校生徒がなんと互いの顔をわかり合つてる環境の中で、兄弟や姉妹が他の学年にいるこ  
との意味は大きい。人気がある子のお姉ちゃんはそれだけで妹の学年から慕われるし、地味な子のお姉ちゃんは、きつと自分  
の学年でも妹と同じで冴さえないんだらうなつて目で見られる。

私は、六年の自分のクラスでは目立つ方だし、スポーツ少年団でバレーやつてるせいか友達も多い。誰とでも話せる方だと  
思うけど、うみかのいる五年の子たちからはなんとなく人気がないらしいことを、肌で

A

感じてる。それつてたぶ

ん、「うみかのお姉ちゃん」だからだ。うみかはひよつとしたら、自分のクラスでも私にするように言い返したり、素直じゃな  
いのかもれない。

不公平だと思う。

一つしか年の差がないせいで、よく体育の授業が一緒になるけど、学年で組んでやるバスケのパス練習でも、私とやりたが

る子は五年にはほとんどいない。だからといって、姉妹で組んで練習することぐらい気まずいことはないから、私は、そういう時にはなるべくうみかと視線を合わせないようにしてる。

外されたり、嫌われたりしてるわけじゃない。

だけど、うちの妹は、たぶん激しく浮いている。〔中略〕

『科学』と『学習』に限らず、私たちはお互いの買ったものを交換して読み合う。趣味が合わない時もあるけど、少なくとも、学研の雑誌は、お互いに黙って読む。

うみかの『科学』は、やはり『学習』に比べて漫画が少ない分薄くて、文章も説明文みたいに淡々としている記事が多かった。あのいは、この勉強っぽいページも、うみかにとっては遊びに見えてるのかもしれない。だけど、私には違う。

「お姉ちゃん」

話しかけられて「ん？」と『5年の科学』から顔を上げると、うみかが「お願いがあるんだけど」と話しかけてきた。

「来月から、『6年の科学』を買ってくれない？」

「え」

うみかが「お願い」と頭を下げた。この子にこんなふうにされたことは、これまで一度もなかった。うみかが聞いた『6年の学習』の裏表紙の見返しに、来月の『科学』と『学習』両方の予告が出ていた。見て、あつと思う。『科学』の方に、『特集・宇宙はついにすぐそこに』の文字が見えた。

気持ちがざわつとした。

クラスの子の中には、『科学』と『学習』両方を買っている子もいる。だけど、うちはそういう家じゃなかった。まだ一年生の頃、お母さんから、片方だけだと釘くわを刺された。

「いやだよ」と、反射的に声が出た。



あんまりなんじゃないか。うみかがどれだけ宇宙のことを好きか知らないけど、だからってそのために私から楽しみを奪う権利なんかない。だいたい、普段あんなに生意気な態度を取ってるくせに、こんな時だけ調子いい。

「私だって、『学習』が楽しみなだもん。いいじゃん、五年の読んでれば。来年になれば、嫌でもあんだ六年になるでしょ」  
「今年じゃなきゃ、ダメだと思う。お願い、お姉ちゃん」

すぐに折れると思ったのに、食い下がったのがさらに生意気に思えた。私だって、『5年の学習』を読むの我慢して、一度だってうみかに頼んだことなんかなかったのに。睨みつけると、うみかが思いがけず、必死な声で続けた。

「今年の『科学』は、特別な」

「どうして？」

「毛利さんが、九月に、宇宙に行くから」

私は呆気に取られた。うみかの目は真剣だった。「お願い」とまた、くり返す。

「五年のより詳しく、そのことが載るかもしれない。今年じゃなきゃ、ダメなの」

「……そんなに好きなの？」

毛利さんや宇宙への情熱のせいなのか、それとも私とケンカして興奮してるだけなのか、わからないけど、うみかの目が赤くなっていた。こくん、と無言で頷いて顔を伏せる。開きっぱなしの来月号の予告ページに、ぽとと涙の粒が落ちた。

二人してお母さんに、『6年の科学』『6年の学習』、両方を買ってくれるように頼みに行く。お母さんは「ふうん」と頷いた後で、うみかに「じゃあ、頑張らなきゃね」と告げた。

「うみか、逆上がりできるようになった？」

うみかの全身にぴりりと電気が通ったように見えた。痛いところ突かれたっていう顔だ。

「うみかだけできなくて居残りになったって、この間泣いてたでしょう？ みんなに笑われたって」

うみかは答えなかった。私は驚いていた。

この子が悔しがるとか、人の目を気にするところなんて想像できない。何かの間違ひなんじゃないかと思っていれば、お母さんが「好き嫌が多いからよ」とうみかに言い、さっさと台所に戻ってしまう。

結局、『6年の科学』の追加がオーケーになったのかどうかはわからないままだった。

その日の夕食、うみかがナポリタンのピーマンを、時間をかけて丸呑みする音が、横の私にまで聞こえた。顔色を悪くしながら、無理して片づけていた。

うみかは捉えどころがない。

ピアノカを忘れた、その日もそうだった。五年の教室を訪ねて貸してくれるように頼むと、うみかが少しだけ不思議そうな表情を浮かべた。

**B**

したような、息を呑むような。

だけどすぐに「わかった」と頷いて、水色のピアノケースを持ってきてくれる。

ひよつとして、ピアノカのホースで間接キスになるのが嫌なのかもしれない。だけど、別にいいじゃないか、姉妹きょうだいなんだから。他の学年にどれだけ仲がいい友達がいたって、さすがにピアノカは借りられないだろうけど、姉妹だったらそれができる。私は得した気分だった。

びっくりしたのは、授業の後、借りたピアノカを返しに行った時だった。うみかの近くにいた五年生が「あれ、うみかちゃん、ピアノカあったの？」と私たちに声をかけてきた。

「忘れたんだと思ってた。お姉ちゃんが持ってきてくれたのに、間に合わなかったの？」

「うん」

頷くうみかは落ち着いていた。ピアノカの側面に書かれた平仮名のうみかの名前が、私たちの間で間抜けに浮き上がって見えた。私は自分のミスを悟る。あの不思議そうな表情の意味はこれか。

「——同じ時間、だったの？」

「そう」

「言ってくればよかったのに」

「だって」

短く答えるうみかの口調に怒っているそぶりはなかったけど、それがよりいつそう私にはこたえた。<sup>3</sup> ピアニカを忘れてみんなの間に黙って座る妹を想像する。六年の教室からも、きつと私たちのピアニカの音が聞こえてきたはずだ。その音を聞きながら、下の階で座り続ける気持ちはどんなものだっただろう。

唇を引き結ぶと同時に、胸の奥がきゅっと痛んだ。素直に言葉で謝ることができないほど、気まずかった。

「逆上りの練習、してる？」

尋ねていた。うみかがばちくりと目を瞬<sup>しばた</sup>く。

私は逆上がり、得意だった。

「一緒に練習しよう」

罪滅ぼし、というほどの意識はそれほどなかった。ただ、一人きりみんなのピアニカ練習を見つめる妹を想像したら、それが逆上りの居残りをさせられる姿と重なって、私の胸を締めつけた。

<sup>4</sup> うみかをバカになんかさせない、と強く感じたのだ。

鉄棒の特訓は、近所の『ちびっこ広場』で放課後にやることにした。私が一緒にやろうと言う前から、うみかは毎日ここで練習していたらしい。

毛利さんが宇宙に行くのは九月。スペースシャトルエンデバーの名前をテレビでも少し前から紹介してる。

「そんなに楽しみなの？」

「楽しみ」

別に意地悪で聞いたわけじゃなかったけど、うみかの返答は短かった。

鉄棒を両手で握り、えいっと空に向けて蹴り上げたうみかの足が、重力に負けたようにばたん、と下に落ちる。

「足、持ってあげようか」

私が逆上がりができたのは一年生の時だ。その時、先生やお父さんが、練習する私の足を捕まえて回してくれた。

「重いよ」

「大丈夫だよ」

安請け合いたしたけど、うみかがえいっと足を蹴り上げたらかなり迫力があつた。捕まえそこねて、さらにもう一回。思いきって手を伸ばしたらうみかの靴の先が額を掠めた。

「いたっ」

「あ、ごめん」

ぶつかった場所を押さえて蹲うすくまった私に、うみかが近寄る。「だから言ったのに」と。

「いいよ。私、自分で回れるようになるから」

「私はいなくてもいいってこと？」

**C** 痛む額を押さえながら見たうみかの顔が、表情をなくした。おや、と思う間もなく、うみかが首を振る。

「ううん。いて欲しい」

<sup>5</sup> 今度は私が表情をなくす番だった。そんなふうになら直に言われたら、逆らえなかった。

「——見てれば、いいの？」

「うん。お願い」

**D** 頷いて、それから何度も何度も、空に向けて足を蹴る。

「エンデバーってどういう意味か知ってる？」

何度目かの失敗の後で、うみかが息を切らして言った。手のひらが赤茶色になって、見ているだけで鉄の匂いがかげそう  
だ。

私は「知らない」と首を振った。

「努力」とうみかが答えた。

空にうつすらと藍色あゐが降りてきて、薄い色の月が見え始めてしばらくした頃、うみかがとうとう練習をやめた。妹が鉄棒を  
離れたのと入れ違いに、今度は私が逆上がりをする。

足を上げる時、つま先の向こうに白い月が見えた。今日、うみかは何度も何度もこうやって、私と同じように、月を蹴って  
たんだなあと思った。

逆上がりを成功させて、すっと地面に降りた私に向け、うみかが「いいなあ」と眩つぶやいた。

「思いつきり走ってきて、その弾みの力を借りるって手もあるよ」

自分が最初の頃、そうやって初めて回れたことを思い出す。こんなふうには、とお手本で回って見せた。二、三メートル離れ  
た場所から走り、その勢いで鉄棒を掴つかむ。月を蹴り、ぐるんと回る。

「こう？」

うみかが真似して、同じように走る。ぎこちない走り方だったけど、そのまま鉄棒を掴んだら、これまでで一番勢いよく足  
が上がった。あと少しできれいな円が描けそうだった。

「惜しいっ！」

思わず声が出た。うみか自身、驚いた顔をしていた。

「まだ、練習してもいい？」

「このやり方で、明日からもやってみなよ。今日はもう遅いよ」

家に帰ると、もう七時を回っていて、私たちは、おじいちゃんとお母さんに叱られた。お父さんがまだ帰ってきてなくて、

よかった。

「明日も練習、一緒に来てくれる？」

うみかとひさしぶりにお風呂に一緒に入った。鉄棒を掴みすぎたせいで感覚がおかしいのか、うみかが何度も手をグーとパーに動かしている。

「いいよ」と私は答えた。

誰かが何かできるようになる瞬間に立ち会うのが、こんなに楽しいとは思わなかった。

(辻村深月「1992年の秋空」による)

問一 —— 線部1「学校で、うみかに特定の仲良しがいる

ふうじゃないことを、私が気にすることだって」と

あるが、「私」は、なぜ「うみかに特定の仲良しがいる

ふうじゃないこと」を気にしているのか。その理由を

説明せよ。

問二 空欄

A

D

なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア こくりと

イ じんじん

ウ ひしひし

エ きよとんと

問三 —— 線部 2「ピアノカの側面に書かれた平仮名のう

みかの名前が、私たちの間で間抜けに浮き上がって見えた」とあるが、この描写はどんなことを強調しているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア うみかが音楽の時間になくしたピアノカは、今日私が家に忘れてきたことになっているものであること。

イ 私がうみかに借りたピアノカは、私の次の時間の音楽で使うことになっていたうみかのものであること。

ウ 私が音楽の時間に使ったピアノカは、同じ時間に忘れ物をしたことになっているうみかのものであること。

エ うみかが忘れたと思ったピアノカは、前の時間に私が自分のものと間違えて持ってきて使ったものであること。

問四 —— 線部 3「それがよりいっそう私にはこたえた」と

あるが、それはなぜか。このときの「私」の気持ちを説明せよ。

問五 —— 線部 4「うみかをバカになんかさせない、と強く感じたのだ」とあるが、なぜこのような心境になったのか。ここに至る「私」の気持ちの変化を説明せよ。

問六 —— 線部 5「今度は私が表情をなくす番だった」とあるが、これは「私」のどのような心情の表れか。説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、河内<sup>\*</sup>の国、石川の郡に八多寺といふ寺ありけり。その寺に阿弥陀<sup>あみだ</sup>の絵像<sup>えざう</sup>まします。

その郷の古老<sup>\*</sup>の人語りていはく、「昔この寺のかたはらに一人の女人ありけり。その女の夫死する日、この仏の像を書き奉らむとする間、この女やもめにして身貧しきによりて、この願<sup>1</sup>ひを遂げずして年月を経たるに、遂に秋の時に至りて、女自ら<sup>2</sup>田に出でて穂を拾ひて、一人の絵師を請じて、彼の像を写し供養せむとするに、絵師もこの事をあはれみて、願主<sup>くわんしゆ</sup>の女人と共に同じく心を発<sup>おこ</sup>して、この仏を写して供養せしめつ。即ち<sup>すなは</sup>、八多寺の金堂に安置して常に恭敬<sup>くぎやう</sup>礼拝せむと思ふ間に、盗人ありて火を放ちてその堂を焼きつ。さらに残る物なし。

しかるに、火<sup>3</sup>の中にこの絵像<sup>えざう</sup>まします。『奇異なり』と思ひて、人寄りて取りて見奉れば、かつて塵<sup>ちり</sup>ばかりも損じ給ふ事なし。そのほとりの人これを見て責<sup>なぐと</sup>める事限りなし。『これ、彼の女人の心を発して写し奉れるによりて、仏の靈験<sup>\*</sup>を施し給ふなり』と知りぬ。女貧しといへども、秋に臨みて田に至りて自ら穂を拾ひて願ひを遂げたる事、極めてありがたし。しかれば、仏もその志を哀れみて、かくのごとき靈験<sup>\*</sup>を施し給ふなりけり。功德<sup>\*</sup>は少なしといふとも、信によるべきなり』。

5 古老の伝へを以て語り伝へたとや。

(『今昔物語集』による)

【注】 \*河内の国 今の大阪府東部。 \*やもめ 夫を亡くした女性。

\*恭敬 つつしみうやまうこと。 \*かつて しまったく。

\*靈験 神仏の示す靈妙なしるし。 \*功德 よい報いを受けられるような善行。



問一 ——線部1「この願ひを遂げずして年月を経たるに」とあるが、なぜか。簡潔に説明せよ。

問二 ——線部2「女自ら田に出でて穂を拾ひて」とあるが、何のためにこのようなことをしているのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 落穂を使用し、阿弥陀の絵を描いて夫を供養するため。

イ 落穂を収集し、夫の墓前に自ら手向けて供養するため。

ウ 落穂を謝礼とし、絵師に仏の絵を描かせ夫を供養するため。

エ 落穂を整理し、出家して仏の教えを請い夫を供養するため。

問三 ——線部3「火の中」とあるが、何が起きたことを表しているか。状況を簡潔に説明せよ。

問四 ——線部4「そのほとりの人これを見て責める事限りなし」とあるが、人々が「これ」を大切に敬ったのはなぜか。「これ」の指すものを明らかにして説明せよ。

問五 ——線部5「古老の伝へ」とあるが、古老の言い伝えで最も重要だとされることはどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア たとえ人が悪事を行ったとしても、後にそれを振り返り深く反省することで救われるということ。

イ 絵師の心のこもった絵像はすばらしいものであり、故人をしのぶ深い思いが読みとれるということ。

ウ 夫を供養しようと女が行った行為は立派なものであり、信仰心が大切であることが分かるということ。

エ 仏様のご意志はどのような者にも示されるものであり、本人に信仰心がなくても構わないということ。

